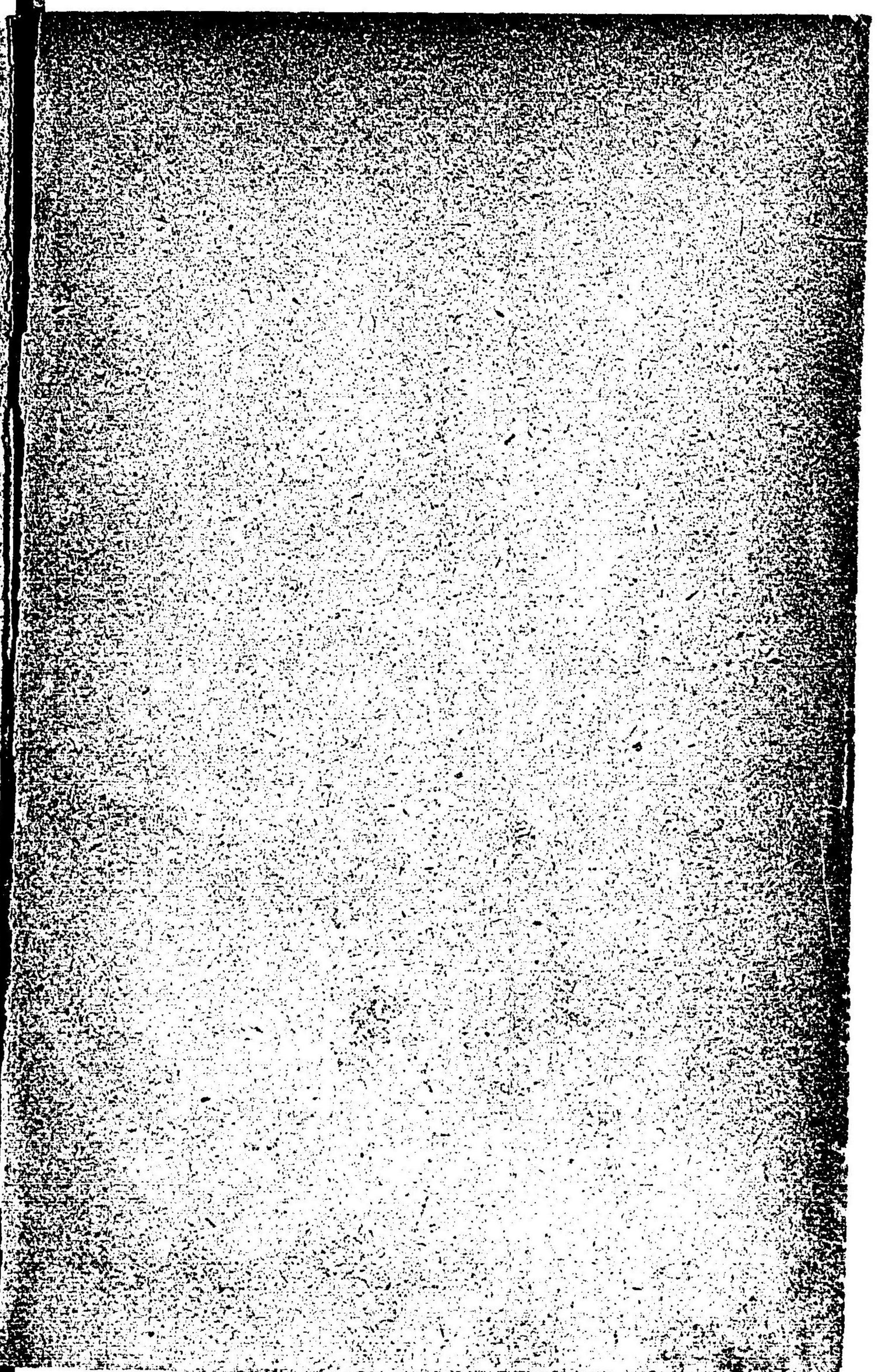




馬

調





羽陽



明治壬辰
古新和歌



序

春深うして花白き朝、建章宮裏に妙なる音色なまじと雖
とも、秋高うして月冴ゆる夕、潯陽江頭に美女か涙なし
と雖も、四絃抹し來る此音、此曲如何なる荒夷も誰か腸
を斷たさりける。

今や薩摩瀉の渚に天吹の音もなく、城山の裙に芝笛の
すさびもなまじ、況んや此物に到ては、稚子童の悪戯に弄
ばれて、糸を斷たれ撥を折られ、空しく廢屋の隅に今昔
の感を止めしが、此頃一人の風雅男有りて、これが塵を

拂ひこれが汚れを拭ひ埋れ果てたる深山木よ花は櫻
 の日本魂を咲かせんと言ふ、借も下里巴人の卑聲にの
 み汚れたる世の中にあはれ拗振拔きと思ひ出や我も
 そゞろに慕かこくて、一句を巻頭に題すらく、
 名月にこちら向けたき座頭かな

于時陰曆九月望日隈なき月を硯に載す

曙山人識

優婉 薩摩琵琶歌目次

須摩寺	壹頁	都の九段坂	十三頁
龜山	三頁	狂女	十四頁
有方様	四頁	長門	全頁
宇治平等院	全頁	別路	十六頁
秋の夕	五頁	俊基朝臣の	全頁
四季	六頁	三界圖天	十七頁
川中島	七頁	反魂香	廿一頁
天目山	八頁	平田三五郎	全頁
賤ヶ嶽	九頁	故郷へ送る	廿五頁
千劔の戦	十頁	熊本籠城	廿六頁
戊辰の役	十一頁	吉田梅若丸	廿九頁
忠臣蔵	十二頁	白菊	卅七頁

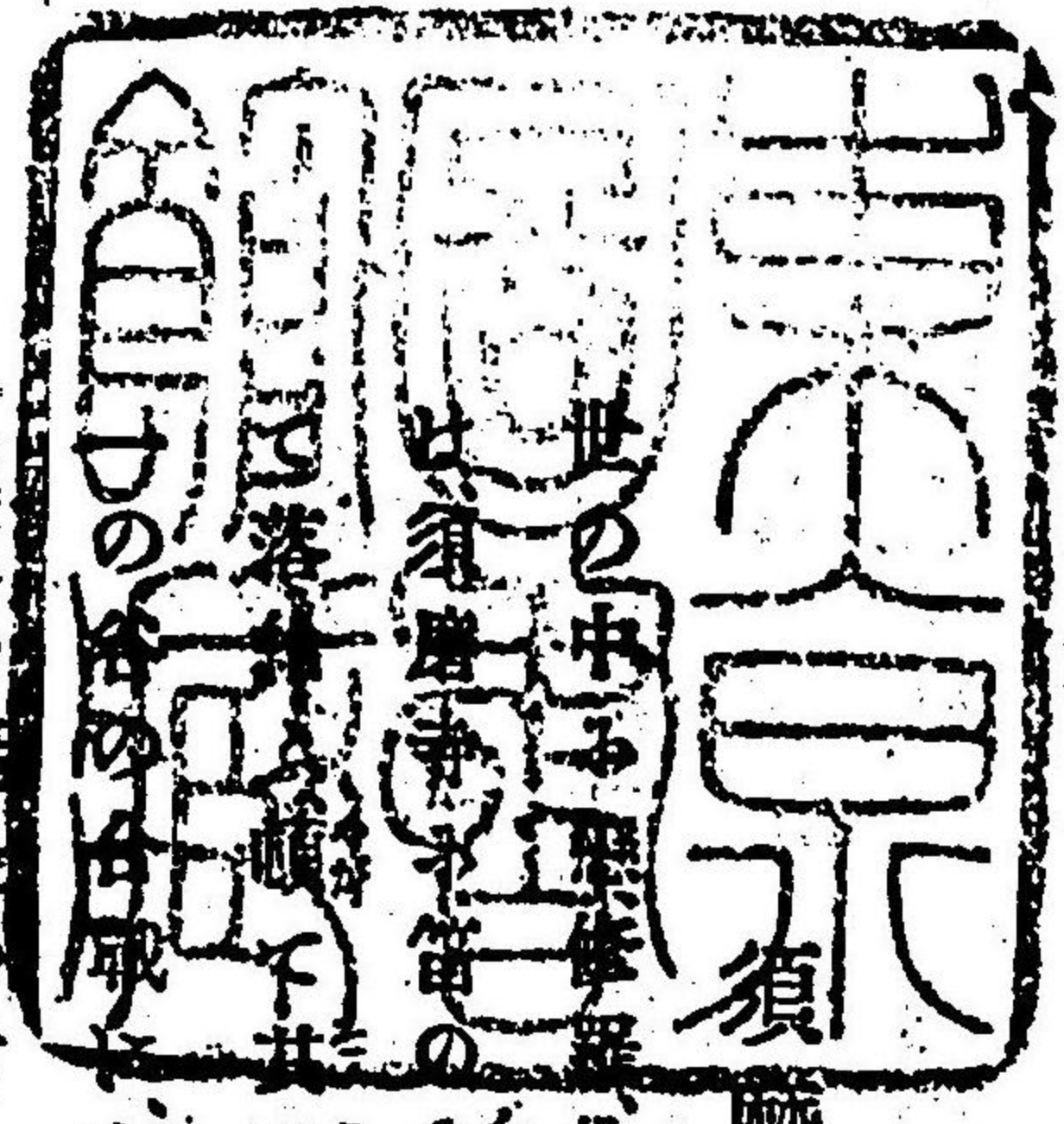
○西南の役

森蘭丸長貞	四十一頁
大川數馬	四十三頁
第二段	四十六頁
大和錦	四十九頁
杉坂の曲	五十頁
曾我の夜討	全頁
詠松島歌	五十一頁
佐久間象山謫居の歌	五十三頁
湘南秋信	全頁

優婉薩摩琵琶歌目次終

優婉薩摩琵琶歌 全

吉田廣作編輯



須磨寺

世の中、佛道、是はみな世にある習ひ是非もなし、無官太夫教盛
 は須磨寺の會ころおもしろや、左もあらばあれ、今はや、磯邊と指
 落、其處にもなりぬれば、武藏國の住人熊谷次郎直實は、此度
 左迄の高名ともせざりしに、夫とうしとや思ひけん、今
 にはや磯邊の方と彼方此方と見廻りしが、此君と目に懸け返せ戻せと
 名乗りあぐれば、いたはしや、教盛は御座船はるゝに隔れば力に及ばず、
 駒の手綱と引返し給ふこそ無念なれ、暫く熊谷と戦へば、いたはしや、教
 盛未だ若手の事なれば力くたふれ、終に熊谷お組み敷られ給ふをば、
 るけれ、熊谷は首の、んとしたりしが、餘り手弱く見えければ、少し引く

つろげ、御相合と見奉るに薄假粧に鐵漿黒なり、如何なる人ぞやと哀れ
 と催ふし、流石に討つもいたはしく、我子の小次郎お思ひのへ、今は早心
 替りと成りにけり、されど矢倉番所の前なれば、熊谷のはや心替り、諸
 共に討て捨よと御意下る、いたはしや熊谷も今は力に及ばず、敦盛の花
 の首と水もたまらず、泪と共に討ち落そ、さらば討つ人も討れし人も武
 士の道とは云ながら、哀れなりし事共あり、熊谷は最早いらぬと弓も刃
 も投捨て、黒谷差て落ち給ふ、早御寺も成ぬれば、上人法師と頼ませ給
 ふ、心の内こそ殊勝なれ、花のたもとと墨に染め、其名と蓮生法師と呼替
 て、三年が程は夜もすがら法華經百萬遍と唱へ給ふ、され共思ひのはれ
 ずして、あたりの空と打詠め、事問ふ物は磯邊に千鳥の鳴くばりにて
 いとゞ思ひの猶増る、沖と遙るお見渡せば、登り下りに行向ふ船は數多
 にて、兵庫、和田崎、須磨、明石、おれに見へたる西寺の、盛りの花と打詠め、音
 に聞えし大坂の、城の要害四方四面に岸高く、四方の圍みも夥し、只何事

も憂きは世の中愁きは敦盛、義理は蓮生法師にて、諸事の哀れととゞめ
 けり。

龜山

龜山の岩根にさわぐ諸葉草、諸心にて替らじと、契りし中の常陸帯、懸て
 思ひの猶も増らん戀しさと道の遠さと身の様と、思ひ續けて涙川、身こ
 そ思ひに沈めども、おはり有るや、假令色増す花はあるとても、言ひし言
 葉の情の末は替らじ、古へは風に木の葉の散る如く、浮名は立と喜しや
 ど、せめて君故立つ名と思へば、此絲の一もと故お現れて今は中々武蔵
 野のあたりの草まで懐らしや、心程心お物と思はせて、身と苦むる、我身
 ろな、涙のよるく、一人寝て、其のいたはしさと思ひあはせば、床も涙に
 浮く計り、我はらほとに思へ共、古の賤の苧環繰返し、きのふと今日お探
 移し、歎けども、今ともしれぬ入相の鐘。

有方様

有方様と見初し以來寐ては夢さめては現其面影が身ふそひて忘れも
やらでいるせん亂れ心や片糸のよるくことと思ひ草達ぬ心は霜
枯の蔭の下葉の蟋蟀恨みては鳴き鳴きては恨む因果なり哀れ自らが
文と一筆しめし上料紙の面に敷と盡して有方様お贈り参らせもしや
返詞の有あらば生れての中は申とに及ばず死して後まで物語にせん
と思ふ心と君がしらねばいとし思は増り草葉末に結ぶ露の身の消ぬ
其間に一夜の契りあれしと思寐る夜の夢は唯幾度見ても君の面影
活る寐覺の淋しきに戀風そよと妻戸とならすまで君が訪ふと思ひ
焦るゝ登小船焦れて物と思ふらん。

宇治平等院

治承の昔し山城に宇治の川にぞ頼政は平家の悪逆憤り名も高倉の宮
と出で雲井とよそに有明の星のあらぬ白旗と宇治の川邊にひるが
へし入り亂れたる戦ひふたのみに思ひし兄弟もうたれにければ今

はや何とる期せんたれ人も平等院の庭のとも芝生の上に座と敷け腰
なる扇うちしきて刀と茲に抜きながら流石名と得し其身とて三十字
余り一文字の世も哀の言の葉と書残しつゝ失にけり。こそ悲けれ

秋の夕

憂き世の塵は隔ねどこまも車も音づれぬ苔の通ひ路世離れて柴の戸
扉ぞ住よる松吹く嵐竹の雨友なき宿と慰めて天津乙女や掻き鳴を
琴の調と聞ゆなり軒端にゐる蜘蛛の園に貫らぬきとめし白露は雲
井の月お照り添ひて玉の簾と見へにける草の根ごとお夜もそがら機
織り虫の聲高し干草の花とあやなして明日は折てん唐錦萬有物と眺
むれば造化の妙ぞ知られける斯く面白き秋の夜も衣あたしき獨りぬ
る夜は憂き物と歎ちつゝ慰め兼ねる人もあり姑しはのめく稻妻の消
えて跡なき世の中と思ひわびつゝ夕暗みお感ひ渉るは憐れなり。

桶狭間

頃ハ弘治三年の春三月織田の信長は數萬の敵と前に置きうち興したる酒宴に人間わづら五十年夢幻しの如くあり一度生と受けしもの死せざるものゝ有るべきと歌ひつ舞ひつ縲り返し自己が意と示しつゝ、駈け出そ騎に鞭あてゝ敵心と桶狭間折柄天もろき曇り砂まく風に礫てなす雨もろ共迅雷の霹靂く太刀と打ち振りて二千餘りの選兵が面も振らず斫り入れば流石に狂けき義元も不意に出たる戦ひに防ぐ謀てもあらずされば空しく茲も果あけり。

四季

出よ人々春の野みれんげの花も盛りなり菜種の花も盛りなりうたふ黄鳥舞ふ蝴蝶浮れ遊ばぬものもなしあらおもしるの野遊びや涼みに出でよ河原まで風心地よく通ふなり月おもしろく照そあり琴と弾くにや岡の松鼓打つみや河の水暑さは浪に流されて散れく夜露我袖に月と寫して翳さまし行けや友達秋の野は今ころ盛り花さのり桔梗

芥萱女郎花萩も薄もなよくと人待顔ふなびくなり踏みな荒しと草苜等吹きな亂しと夕嵐明日も来て見ん此の花とふれく小雪吹小雪向ふの松も隠るまで垣根の竹も撓むまで拾へや子共玉拾へ翳せや子共花翳せあら面白の雪景色銀の世界に成りにけりなほ降れ小雪明日までも。

川中島

民の籠のろれならで敵の陳屋にたつ煙り早くもそれと上杉が西條山と捨るゝり川中島の中堅とたゞ一討と攻めあゝる不意の軍に川千鳥群れ噪ぎても武田勢矢竹心は引まじと入り亂れたる戦場に堅子は何くと謙信が振りかざしたる電光の刃と合す隙もなく危ふありける信玄が持ちたる軍扇のまゝに太刀おと留めて今の世に烈しきさまと傳へけり烈しきさまと傳へけり。

東都に送る

木梢と鳴らす秋風に、一度去つて還らざる、壯士と送る、易水の昔しも、今も變らざる國と民との爲めなれば、身とも命も顧みず、墳墓の土地と跡も見て、都といへど住馴れぬ土地と故郷となしつゝも、蓋の机雪の窓、蝶の暫し間は、時と松ヶ枝、歳寒の風雨あらば、折あらば、國と民との傘となり、幸榮福利と増進し、假令太夫封得ぬも、常盤の色の變らざる、天位天爵心懸け、利祿の霜お湖むなよ、云ふべきことは是のみぞ、行けよ行けよ、疾く行きて、吾妻に花と咲せつゝ、あづまの花に染む勿れ、あづまの花に酔ふ勿れ。

天目山

名は山梨のやまの國、殊に名高き天目山、これを古へ勝頼が終りと告げし所として、空ふく風の哀れ添ふ、人の心の常あくも、股肱と頼む郎黨が、もひ甲斐なくも、敵に媚び計りし田野、水もりて、いたくも負けて、韭ヶ崎涙とあどに、落ちのびし、碎けて今は、旅人の袂と松のした露に、ぬれて昔

ぞ忍ばれぬ。

賤ヶ嶽

ころは天正十一年、怨みも積るこしの雪、未だ解けやらぬ彌生ぞら、朝日と昇る秀吉の威名とこゝに、挫ゐんと、いつの敵に近江じや、しばし屯を柳ヶ瀬と血氣にはやる盛政が、敵の模様と探り知り、忍びくゝお峯つたひ、東雲ちらく大岩の磐およせて、攻め入れば、不意の事とて、清秀も防ぎおねでの打死に、勝て兜の勝家が、誠めいつらうち忘れ、足と安むるひまよへも、軍機に敏き木下が、地より生し、東の間に瓢のしるし閃らし、われ後れじといさまさきて、清正以下の英雄が、敵の首と鳥打の、さうまく風に木葉ちる、秋にはあらぬ春の、雁行と亂して、ちりくゝに、越路とさして、歸りしは、其の名も高き賤ヶ嶽、七ツの鎗のいさはしと、譽れと今に傳へけり。

千劔の戦

千劔の城にたて籠る金鉄剛勇忠臣の謀略深き正成が指揮に従ひ要害と固く守れる武士は寄せ来る敵を勇しく花々しくも戦ひて東國勢と揺るんど待に待ちたる折のらに時雨の如く六波羅の大軍一度に進み来て四方と取り巻く千劔城旗指物はひるがへり野山の紅葉秋氣色又其中お閃くは劔の光さらくと朝日お輝き又映じ目覺しありし次第なり雲霞の如き大軍と少しも恐れず正成は催の斗りの兵と彼處此處に戦へば敵は侮どり此小城瞬間中に落さんと手負の猪の夫ならで進むの外は知らざるぞ此時正成指圖して石や大木投げ下し楯とみぢんに打碎き討だす矢先に當りたる敵の尸は重りて死するものこそ多かりし又は矢傷お苦しみて死生半は數しれず六千余人忽に殺て手たておちぢ恐れ進む氣色は更おなく漸く後へ引にけり正成日夜精神とめて勵まそ其中に變顯百出圖れず疲れ苦しむ敵兵は進退こゝに究まりて金城湯池の固めおはあらねど堅き忠臣の功は今お轟るめり。

成辰の役

世の中は有爲轉變の飛鳥川昨日の淵は今日の瀬と替る明治の其初め將門武職と放棄して其政權と奉還す結果伏見に現れしが忽ち敗れて逃げ下り本城兵器と奉呈し主將謹慎なせしむ臣屬ますく擇ばず黨と立て義と稱へ彰義隊ぞと自稱して忍が岡お楯籠る其外遊の風体は長劔大鬚高木履偃蹇倨傲日お増して暴行威柄と張りければ屢々解散をせしと命令おれども聞いれずされば追討すべしとて薩洲はじり肥後大村又佐土原の軍勢は本郷口より進撃し備前藤堂阿波尾張紀伊安藝築前おの兵各持場と定めつゝまづ大砲と運して其黒門と打破り彈丸雨飛の其の中とことゝも爲さず奮進し息とも繼せず攻ければ賊は走りて伽藍お據る官軍はお火と縱ち四方圍て攻撃ければ或は討れ脱れいで山上山下寂として影だに見えず成にけり。

忠臣藏

三百餘名の血盟も、僅に残る四十七、或は商賈に身と變じ、或は門卒下郎となり、吉良氏の邸に忍び入り、油断と搜る其苦心、何に喻へん様もあし。中に首領の大石は、淫酒に其身と溺して、廊通ひお日と暮し、或は新に家と建て、故主と思へる節操は、秋塞もあき有様と、敵方これと探り得て、今は恐るに足らずとて、其警備とば解おけり、仕済したりと、長雄等は、既お夜討の日と決し、救火者輩の行装にて、各々四人と聯合し、合符もてお互お怪我おやまらと無らしめ、前後の二門お馳せ向ひ、梯と以て塀と越へ、槌にて扉と打破り、大喊一聲呼で曰、淺野の遺臣に候ぞ、仇と報する其の爲に、推參せりと口々お皆呼はりて、亂入り、抗抵者とば拜み討ち、續て進むと、穀竹割、直に進んで寢室に入り、怨敵義英と搜りしお、其厨傍の外營より、瞋昧者とば引出し、その名と問へば、答へなし、是は不審さ曲者と、鎗取延て、間光興其胸中と刺しければ、重隆太刀と打振て、只一刀お首と討ち、門者と執へて、腰め問は、果して館主の義英あり、乃ち呼子の笛と吹き

西南の役

衆と集めて、其首と鎗の穂先お貫きて、東雲告る鐘のこゑ、泉田寺にと急ぎつ、亡主の墳墓に祭りしは、例少なき忠臣の、鑑とこそは成にけり、
 借も西郷隆盛は、過激の暴徒に推れつ、篠原桐野と諸共お新政厚徳の旗と立て、意氣揚々と繰出し、熊本指てぞ押し來たる、されば親王御出張また熊本の鎮臺は、谷少將の守られて、軍備最も嚴密にて、残るおたなき軍配に、流石過激の暴徒らも、容易く進軍ならざれば、其川尻お陣と据え、新政総督大元帥、西郷何某本陳と、大書なしたる標札と揚げ、兵と各所に繰出し、川尻植木田原坂、晝夜晴雨の分らなく、最も劇しく攻立る、砲聲天地と轟し、砲烟満ちて、日とも見ず、前代未曾有の劇戦あり、賊等奇謀と搦へつ、攻撃數月に亘れども、熊城ますます、嚴乎とし、落べき景状も見へざれば、官軍勢ひ日おまもして、賊焰日々お滅滅す、されば老賊こらへおね、各所の人數と引き續め、日向に走りて、高千穂の險とたのみて防禦と

錦旗の勢威をるせきて、此所にも更に保ち得ず、唯一方と切り開き、故國に奔り城山に必死と極めて防戦せしが、天兵雲霞のごとくにて息も繼せず攻立つれば、老練無双の賊輩も、今は術計つき果て、遂に戦致したりけり。

都の九段阪

此は都の九段坂、皇國の爲めに死す人の神魂と祭りし九重の皇城と守護の靖國と、御名と賜ひて建てられし、千代八千代まで朽るなく、拜みまつれば、武夫の斯ころあらめ、海行ばみつく戸の山行かば、草むするばね長くも、我大君の御爲には、露の命も仇櫻吹ける嵐に散と埃つ、心の内を樂しけれ。

狂女

人間の世の有様と心に留て按ずるお、一度は盛り又一度は衰へる事あり、さればおや水の流れて其水上お歸らざるが如くあり、祇園精舎の

鐘の音諸行無常と現はして、飛花落葉の如くなり、只いたづらお過る日は夢の内ある夢あるれや、其古郷は我ながら、美人の姿人おも勝れ、綺室の花とや作られて、雲の上なるすまひとあせば、今と盛りの花のつら掛巻も、忝や我君の御身近く召仕はれて、月見花見の御遊の供錦のすだれ玉の興、明暮馴れし身なれども、人一盛り一時お移れば替る世のうさも、其寵愛もあれ、今憔悴と衰へて世にも物うき狂ひあな人生れて、婦人の身と成る事なられ、百年の苦樂他人の上お有り、と、伯樂天が詠たる詩も、今身の上おしられたり、おはれた、芝の庵お人伏て、獨り涙お伏しつむ、燈々たる燈火、蕭々の夜雨の窓うつ音、までも恨と添ふるな、だちとなり、餘り恨みの數重なりて、唐土迄も届くらめ、哀れ貴さも賤さも、物思ふ身は異ならず、流れ絶へせぬ水とて、淵瀬と替る如くなり、只何事も因果のめぐる小車の、我惡業お引れ來て、斯くは浮身とてがそらん、

長門

道は六百八十里、長門の浦と船出して、早や二とせと古郷の山と遙るに
眺むれば、過り勝ちなる旅の空晴さあやならぬ日の本の御國の爲と思
ひあは露より脆き人の身は、爰が命の捨てどころ、身は彈疵劔傷負へ
ともつらぬ(赤十字)猛き味方の勢ひに、敵の運命究りて、脱きし胃と戦の
尖串てを還る勝利軍空と曇も今日晴て、一層高き富士の山峰の白雪消
ゆるとも、勳と建し丈夫の名譽は永く竭さらん、

別路

別れ路は人の上さへ恨めしく、今身の上に白雪の積りて口惜し我心深
き情と梓弓矢先と何と白雲の添へき緑のあちざれば、寢入らで物と岩
松の年ぞつもれば、其色振は替るとも、言ひし言葉の情の花は、散らすま
じとの定めめて先此程は比翼連理と深く契りて互ひみ手枕交し候へ
とも、今は又如何ある人の譏言みや、別れに心の隔らんうづろい易き君
とは知で何しに心と呉竹の世々み契りし言の葉が紅葉とありて散り

行くのあぢきみや、君今宵誰が手枕み假寝して、我とば餘所に語りあす
らん、只世の中み人の心と花の心は、頼むまじきと知るや秋風。

俊基朝臣の

落花の雪み踏み迷ふ片野の春の櫻がり紅葉の錦着て歸る嵐の山の秋
の暮一夜と明す程だも、旅宿とあればものうさみ、恩愛の契り淺ら
ぬ、我が故郷の妻子とば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴し、九重
の帝都とば今と限りと願みて思はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞ哀なる、憂
とば留ぬ逢坂の關の清水み袖濡て、末は山路と打出の漢沖と遙に見渡
せば、盪ならぬ海にこがれ行、身と浮舟の浮沈み、駒とどゞると、闇鳴と、勢
多の長橋うち渡り行向ふ人み近江路や、世のうねの野み鳴鶴も子と思
ふると哀なり、時雨もいたく森山の木下露に袖ぬれて、風み露散る篠原
や、篠分る道と過ぎ行けば、鏡の山はありとて、涙に曇て見ぬわが支物
と思へば夜の間も、老藤の森の下草に、駒と止めて願みる、古郷と雲や

隔つらん番場醒井柏原不破の關屋は荒果て、猶もるものは秋の雨、いつ
 う我身の尾張ある熱田の八剱伏拜み、鹽干に今や鳴海瀟、傾く月に道見
 らて明けぬ暮れぬと行く道の、未はいづくと遠江、瀨名の橋の夕、盞お引
 く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身おしあれば、誰が哀と夕暮の、晚鐘鳴
 は今はとて池田の宿に着給ふ、元暦元年の頃のとよ、重衡中將の東夷の
 爲に囚れて、此宿お着給ひしお、東路の丹生の小屋のいよせきお、故郷い
 かお戀しゐるらんと、長者の女が詠みたりし、其の古の哀まで、思ひ残さ
 む涙なり旅館の燈、幽にして鶏鳴曉と催せば、匹馬風お嘶きて、天瀬川と
 うち渡り、小夜の中山越之行けば、白雲路と埋み來て、そことも知らぬ夕
 暮に、家郷の天と望みても、昔西行法師が命なりけりと詠じつゝ、二度越
 ぬし跡までも、浦山敷ぞ思はれける、隙行駒の足はやみ、且已お亭午お昇
 れば、駒進する程とて興と庭前おゐるし、轅と叩いて、磐固の武士と近
 づけ、宿の名と問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の

時院宣書きたりし答お依りて、光親卿關東へ召下されしが、此宿おて誅
 せられし時、昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、今東海道菊河宿、西岸而終命」と
 書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上おなり、哀やいと、増りけ
 ん一首の歌と詠じて、宿の柱お書きける、古もゐるためしと、菊川の
 同じ流お身とや沈めん、大井河と過ぎ給へば、都にありし名と聞きて、龜
 山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭鶴首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍
 りし事も、今は二度見ぬ世の夢と成りぬと思ひつゝ、け給ふ島田藤枝お
 懸りて、岡部の眞葛裏枯れて、物かなしき夕暮に、宇都の山邊と越へ行け
 ば、葛楓いと茂りて、道もあし、昔し業平の中將の住所と求むとて、東の方
 お下るとて、夢おも人に逢ぬなりけりと、詠みたりしものくやと思ひ知
 れたり、清見瀧と過ぎ給へば、都お歸る夢とさへ、通さぬ波の關守に、いと
 涙と催され、向ふはいづこ三保が崎、興津神原うち過ぎて、富士の高峰
 と見給へば、雪の中より立つ煙上なき思お比べつゝ、明る霞に、松見へて

浮島が原と過ぎ行けば、搦干や淺き船浮きて、ありたつ田子の自も浮世
と遠る車返し竹の下道行きなやむ、足柄山の嶺より大磯小磯直下て、袖
おも波は小綾の急くとしもはなけれとも、日數つもれば、七月二十六日
の暮程ふ鎌倉にころ着給ひけれ

三界圖天

三界圖天として一切衆生と生れ來る身も告と請け、恨み間敷身とも恨
み、我と迷の雲深く、真如の月の晴る隙とて更みなし、地獄餓鬼修羅畜生
せんしや、いはんこの間と經廻りて、今は此世に生れ來て、設けの如く優
曇華の花も逢ふが如くなり、たまさる此世も佛一跡と生れ來て、今生に
て菩提と求め、此度淨土も到らずば、何時の世もらは浮ぶべき、悲しい
あや、皆人は夢なる事と知らずして、千歳の齡とむさぼりて、只惡業の種
と又我と作りし火の車、身より外ふは恨なし、綾錦萬の寶は此世の飾り
若き時より道とも學び、後生と念ずる輩は、後の世迄も佛とぞなる。

欠

MISSING

れと申しも取へず涙とば鏝の袖お注ぎつゝ、義心氣色お見わたるき、
天子御簾と掲げさせ、近く召れて正行よ、此程數度の戦に敵の勇氣と摧
きたる、父子累代の勳功は深く感ずる所あり、朕は汝と股肱とす、必ず
命と全ふし、國家の重きお任せよと畏さ詔ありければ、正行頭と地お着
て、是と最期の參内と思ひ定めて退きぬ、斯て一族郎黨と、後醍醐帝の御
陵へ參りて御暇申し上げ、如意輪堂の壁板お、各々名字書連ね、又其奥お
歸らじと兼て思へば梓弓なき數おいる名とを留むと鏝もて、一首の歌
と書き殘し芳野と出て勇ましく、四條繩手に向ひける、

吉田梅若丸

柳も今朝の春雨おまた染られし淺緑枝毎の露の玉涙絶えぬ愁嘆お沈
む身もおなじ柳の織眉や、我梅若と名告らねど、さしも句は在原の君は
穉き餘も斯くありけむと見る迄お、妾を清き童の年齢も十六夜月の面
吹蒐りたる浮雲と拂はん事も奈良坂や兒手柏のねちけたる人お連れ

られ住馴れし花の都といづみ川みかよいつるとふる郷の母の上のみ
 思はれてきつゝ馴れおし旅衣はるく來ぬる事としも思へばいと
 子心お唯悲しさは彌生の春の景色も目お入らで物思のみ添ふるなる
 こゝは隅田堤とよまだ泥濘さへ乾く間も情なみだの身もあるに波だ
 に立たぬ川面や浮寝お夢や水鳥も都といへば懐しや羨ましくも樂氣
 お母子並居て泳ぐるも汝は浮寝お夢と見る我れは憂目の夢にしも母
 君とのみ見進らす切て此身の鳥あらばのゝる憂お遇はせじとばあり
 おして思ふ事口おは夫れと云へばえお岩根の躑躅露重し首垂れたり
 し風情あり藤太は之れと見も返らず早秋田ある人肉經絶と直段濟み
 し体裁見るに得堪へず梅若丸胸も塞れば手足も戰へ其儘大地に撞と
 伏し道は情無き事こそよ假令甚麼なる苦と受けなんとも母君お逢
 ふべき方便有るならばうは切てももの事なら秋田は北の果と聞く其
 處お行きなば環會ふ事とて得ころ有らざらめ都お在りし頃だにも七

十五日の其内に音信聞ねば御心の休まる間もあらじなを豫ては母も
 宣ひき踪跡知れすと聞きもせば御命さいなくならん天にも地おも只
 一人の母子なるとば慙れみて赦てたもと手と合せ涙ながらお口説け
 ども情と知らぬ悪徒には隠にいふ驢耳彈琴聞きも果たさそて之暴ら
 げ外聞歹し何との言ふ双親とてもあらざれば頼むは伯父のおんみの
 み只此後はのにくと御心配給ひねと其口づゝら此吾に頼みたりし
 と忘れしゝるると今更我言と聞入れざるは奇怪あり斯くても辭むの
 行のざるや行き候はんと言はれずや猶も執念く嫌いと情用捨も荒鷲
 のそれおも増し無殘の曲者棒振上げて丁々と處嫌はぬ連打あらしき
 風にも觸ざりし身とくまでに爲られては夫まだ替の梅若丸皮肉も
 破れ身も利のすされと心は猶いまだ確あるおぞ身と掻き戰へながら
 に打合せ赦したまへと拜むなる双手に傳はる血汐の紅髪の緑や揚柳
 の風に亂るゝ物思ひ縛紡苦しと啣つめりゝる處お來るゝりし忠院

阿闍梨はのねてより藤太の品行と知るのらにのくと見るより馳寄て
 汝れ藤太の猶いまだ悪しき心と改めず罪無き人と苦しめて墮獄の種
 と養ふの僅のなりとも悪と爲ぞ終に積れば小悪も大悪とこそ爲るべ
 けれといふ言葉とば思はずや、下根劣慧の身なりとも、只清淨と旨とせ
 ば功德は無量なりと云ふ、其子ばありは料らずも吾目にのりたりけ
 ればいので救はんと思ふ、吾に得させよ、與へよ、と乞ふと藤太は聞取
 ず黙れ悪僧肝太し、這奴の容顔艶婉と見たれば行童に爲まはしと思ひ
 て術よく思へばとて欺むるべき吾あらず猶龍陽と愛づるある、其煩
 惱のある身にて藤太濟度は覺束なし止みねく、と冷笑ひ又手と伸べ
 梅若と禺と引立つれば無殘やな、快くも五体は萎疲れ、起つ事さへも中
 垣ふ冬と凌げる蟋蟀鳴く音も出でぬ光景と見つゝ藤太は舌打鳴らし
 借も脆さよ快死ぬの縦哉死なすとも、のくまでに弱り果てゝは賣りし
 とて銀一文にさへならず由ある事としてけりあ、空骨折らし、報には

斯うよとばあり牽据へて肩腰脊の嫌なく足に仕して蹂躪り静に塵と
 打拂ひ、忠院坊とみるへりて曇より暮ひたまへる兒が横死の事なれば
 嗚悲はしく在すめり、嗚傷ましく在すめり、誠に珍重くと飽くまで罵
 嘲りつ踪跡も知れずなりにけり折るら往來の人々も是等の様お何事
 ぞと集りたるも多さにぞ忠院坊は今迄の事詳に説示し、水よ薬とひし
 めきて頻に介抱するもの、のら情視れば身の粧も垢附きたれを脱し、の
 らす如何なる君の御子ぞや、荒き風にあたも當られず育だてられたるも
 のならんに、授ても可哀や傷ましや、御名は甚麼と尋ねたる其聲耳お入
 りたりけん、今と限りの梅若も苦しき息と吻と吐き、忝なや御情のなら
 ず忘れ候はじ、夫に就きても猶更に怨めしきは、那藤太なり、已が榮利と
 貪りて何罪咎もあらぬ身と欺き、遂せ末終にのゝる憂目と見とるなる
 身は此儘に死ぬるとも厭ふべのらぬ事ながら心にのゝる一事は、唯北
 堂の上になん、快藤太にひ道もけらし、七十五日の其間だに音信聞のね

ば御心も安らじなと宣ひささると此身が行方は、知れずと聞召され
 るば、そも如何ばあり、嘆悲み給ふらん、夫れと思へば斯くまで衰
 え果てし身ながらも只命のみ鴛鴦の、恩愛二ツに身とせめて、心苦う候
 ふ、些しは可憐と憐せ、あゝ骨々の碎けし、處も分りて痛むある、現に苦
 しやな堪難や、斯くても助あるものある、扱ても助あるものならば、こ
 や喃道德、喃道德、大慈大悲の情にて、争助けてたまへし、こや人々とは
 りりにて、涙ながらに身と腕き大地と、腕腕する重疵の苦み、見るお忍びぬ
 側の人々、身も千切る、が如くにて、齒根み力と入る、のみ、僅るお之れ
 と抱きつ、御理よ理りよ、嘸苦しうは在すめり、嘸つらくこそ在すめれ
 然れども、俺們がらく、勳つて進らすれば、苦痛も霎時の程に、あん、やがて
 怠り候はん、幸道德も在すなる、加持受け給ひ、とすのせども、見れば顔色
 益悪く、耆翮の妙手ありとて、も助あるべうもあらざれば、措て涙と、呑む
 ばあり、唯身体とは、撫擦り、勳るもの、あらし、漸々に、色も變りて、眼も凹み、弱

りく、てなるに、なん、流石に今は梅若も、逃れ難しと思ひけん、僅るお眼
 と見開きて、あゝ我ながら、鈍ましや、とて、もろくても、斯くまで、お弱り果
 ては、玉緒と繫得べくも、あらさると、とあろく思ふは、無益なる、さらば、素
 生と聞ゆべし、故郷は、しも、花洛なる、北白川といふ、處、我名は、吉田の梅若
 とて、吉田少將維貞が一人の子、あてこそ、候へ、五歳の頃に、父君は、おくれ
 たまひしもの、あらし、お母君いと、丸の身と、哀に思ひ給ひつ、一日も、御
 身の傍と、離す心は、在さねと、只、學問の爲なれば、七歳の頃に、大比叡に、丸
 とは、登せた、まいけり、夫より、後は、此年迄、九十年の、歲月と、丸は、學の窓に、
 經て、稍、物事と、習ひたる、其、甲斐とて、も、あらし、男の、藤太に、鈍や、欺られ、斯
 くまで、よとも、白梅や、唯、途、次、涙に、ぞ、ぐれなる、梅の、香と、薄み、薄きに、似た
 る、情、縁も、厚られしと、八重梅の、八重に、一重に、神あけて、祈り、來にし、も
 豊後、梅實の、嵐とは、免れて、育ち、行き、なん、事との、み、望みたる、には、非ずし
 て、鶯宿、梅の、やがて、また、故根に、歸り、母木とは、慰め、なんと、思ひたる、うは

今更にうたゐたや、おはれ果敢あくるみがた、涙にやせれる月影の心
 は清く隅田川、斟みなは知らせ給ふあん、二八の年の今日が今、あゝる處
 に野晒の身とならんとも、白川や、北白川に在ますはる、母君とても夢に
 だお斯くとは知らせ給ふまじ、先立つ罪と思ふら、唯夫のみぞ迷ひな
 る、忘れも得せし往る月、師の坊よりの允可にて、久振りなる宿歸り、母君
 おしも逢奉り、やがて別に臨みしに、門の口まで丸としも送りたまひて
 其後は何時來給ふと宣し、其御言葉は今生の聞納めにてありしが、あ
 ら又しても愚痴ありき、迷ふは事の坊げよ、ちらは方々此上の御情にて
 丸が身の骸とはやがて此河原に埋め給ひて一本の柳と植ゑて墳墓の
 誌に爲させ給へるし、是れぞいまはの情愿なる聞入てたべや、嘯と途
 断へながらも漸々に語り了れば心さへ弛みし儘に息根も、おはれ乍切
 れにたる、是梅若の断末魔、書き綴りしも今日君が千代の住處に詣來て
 唯往昔のしのはる、思ふに堪へぬはありある、昔淋しき隅田川原、今賦

しき隅田堤、昔の今日は梅散りき、今年の今日は櫻ちる散りては土に歸
 るら唯故郷に歸るべき方無ありしぞ怨めしき、移更れる世の中に、昔
 も今も變らぬは、此川水の色になん、此柳葉の色になん、君も一回此色と
 變せしと思ふらな、今夫れとしも見る身には、猶一入の想像なる、

白菊

秋は唯さへ悲さお、心の愁有磯海、深き愁思お堪回ぬる、身には哀も一入
 お、増穂の薄いとせめて、穂にも出づてふそれならん、まだ初霜に逢はね
 ども、葦果てたる白菊が、曠の姿又更に、笑むにも優る麗さ、名に因みてや
 亂菊と、染めし生絹の裕着て、雪より白き練絹の、奴跨穿きたる姿の優さ
 唐輪お結びし髪さへも、今はと思へば繕るはで、亂薙りし髪、の毛と傳ふ
 涙の玉、散碎くる胸の苦さと、明けて言ふべき人とても、渚の道方たせく、
 と進來りの側なる、渡守とは呼近づけ、手におつ扇と、返興しつゝ、
 守、此後に、我と尋ぬる人ありて、爰に來らん事あらば、夫なる扇と見せね

ろし、勢忘れぞ頼むぞ、〓と何のは知らず言置きて又静々と進行く、歩
 の敷の一足は屠所の羊にあらねども、冥途の旅の一里塚、岩屋の門の門
 松も、樫は更へぬ深緑、翠の髪うぶの末長き命捨つるも誰がため、例少き身の
 果の、我や何處と死所と、尋行くこそ哀なれ、炬石と過行けば、路究まりて
 岩高く、鳥も通はぬ絶壁の、苔滑に雲蒸して、足もそべれば、流石にも頓て
 死なんと覺悟せし、身さへもいと、戰はれて、岩も縫もいぢらしき、恐る
 くも首と伸べ、淵は如何と差覗けば、さしも涙は湧返る、八苦の海の浪
 暴み、音凄まじく色蒼く、奈落にまでも通める、〓許させ給へ御僧正、此年
 來の御情、富士の峯よりも猶高く、此淵よりも淵深き、それ思はぬに非ず
 して、斯くも覺悟と極めしは、仇なる事に候はじ、過ぎつる頃の島詣、山の
 中にてゆくりなく、那人さまお邂逅つ、見掛けられしは身の詰折々、途お
 て遇ふ毎に、わりなく袂引止め、口説く言葉も最切なる、一未だ名さへも
 白菊と、人お聞きしと初にて、君と一回見てしより、日々に炎情は亂菊の

欠

MISSING

推鎮め、今更何と言ふべきの、夫さへ分く方とても無し、あゝる様ども成
果し心の裡の切なさは、思細りし命毛の筆に言はせて快己お進らせた
れば、改めて語出づるに及ばねど、先程までは和君より、如何なる答あり
あんの、一期の浮沈此時と思決めて有馬山、いゝにはあらぬ稻庭、心のた
けと巻込めし、色よき應辭得たるのら夢のと思ふばありにて、只嬌さお
飯さへも、食べで獨只管お暮れあん事と松明や、燃ゆる心の烟こそ、今宵
やうやくおく露の情に因りて消えぬなと、末の事までおにのくと、思へ
ば常は長らぬ、冬の日脚も最長き、心地はありを駿河なる富士の高根
の雪おろし、梢お寒く吹鳴りて、やゝ薄暮となる鐘の音待付けて、扱ころ
は、あくも参りたりしなれ、叶難ある願とば、叶給へし御情いつお忘れん
忘るべき、禮と申そに言葉とて、有らぬと察したまひてよ、||とばありに
して其跡は、さそが物とも言へば得に岩切通し行く水の心と酌みて賜
ひね、といふにも似たる容態と見つゝ、何とのお思ひけん、數馬は俄に座と

正し信と容と改めぬ、

四十六

一段

暮れては長き冬の夜も、兎角の言に時移り、酉の中刻と告ぐる、鐘は上野の淺草の寺にてたてし薄茶より、厚き惠と細川の君に得る身とある、爲る、生る、四位の(稚)昔も例ありそ、うみ、深草あらず、淺草の處も處ゆくりなき、行逢よりぞ戀初めし、人の姓は大川や、と、わく、我身は淺草の寺にて奇しき事にのみ逢ふものなりと見るゝらに、思へば今は細川の流の中にありあがら、また大川の情にて、浮木に逢はん龜之助、(數馬の原名)俱不戴天の父の仇報ひん、術も有らん、と、思附たる心より、今宵は君の眼と忍ひ忍び、あゑたる人としも、忍ばせられたれば、對面の、口誼も濟みて身と正し容と改め言出づる、其言葉さへ忍音なる、||取るにも足らぬ某と、さまで愛でさせたまふ事、現み音ならぬ縁ぞと思ふば、ゝらに嬉さは限もあらず候へど、和殿は文武兩道あ、奴もあらぬ丈夫と、ゝねては聞きて候ひ

欠

MISSING

たまひるば添くぞ候ふ。〓と年には増せて理と盡くして逃べも訖りたる言の葉末お咲く花の氣韻はいと深見草何中々と古の人の言ひしも流石に思出さるゝばありなり。

こゝろさへもちのよごろのつきじもの。

ねもてとともなきよくもあるあな。

大和錦

今も古も天照らそ神の宮居は神さびて伊勢津お引る糸車大和錦お織りなせる其御旗とは五月蠅あそ心も黒き夷らと撫近づけて穢しつゝ皇御國の雲井まで已がまふく踏みあらし彌生半の事なれば金の光りに眞心も皆むのくとなづみつゝ大宮人の身ああらん五月蠅なしめる憂き事と雲の上まで曇らせて赤き心の宮人にとらへ盡して東路へ圍み下して武藏なる獄屋の中おひそめらる眞心深き人々と猶惡しざまおとりあして罪なき罪に罪あひて親の罪とて子供まで遠き島根

に流しける猶春雨にそはぬる、鶯ならで我袖お落る候は乾はかねど
露打拂ひ丈夫が心と猛く取り直し大浦波と生へしける八重の葎とな
き盡し錦の御旗春風お吹きなびかして梓弓引きしぼりつゝ夷らと千
里の海に退けて猶日の本お千万の夷の國となびかせん、

杉坂の曲

杉坂の木隠と、磐固の武士に知られじと後れ先立ち見え隠れ跡とめて
行く風聲の茲は行在衛士が焼く杉の火影も消えくゝお草木も睡る丑
三ツに忍がへしのお塚のもと忍ぶこの身は驚おつら君とすがらむ一筋
お彼方此方の庭傳ひたどる築山瀝水の深き心と涙ませたる十字の歌
の主やたれ問へど答へぬ櫻木に残る跡は見えぬから花も實もある大
丈夫の行方行處里の名の杉坂のみぞ立てりける、

曾我の夜討

去れば其時二人の出立は母の給ひし小袖とは襦十字お絞りて共に松

明振り照らし、敵の陣屋と探とも如何に是れば人もあし茫然と佇める
折りしも見ゆる燈火の影に二人は身と潜め見れば工藤の局あり祐經
何處と尋ぬれば先頃既に御陣變へ不忠ながらも是迄の御恩お報ひ奉
らん、いさ此方へと招じける、雨戸すらりと打ち開けば、工藤左工門祐經
は前後も知らず臥しおける、見るに二人の兄弟は、天にも登る心地し
て、十郎五郎に打てと云、五郎は兄に譲りける、聲と掛くれば祐經は、枕元
なる刀とば、取て起んとする處と、十郎早くも肩先へ斬込めば、續ひて五
郎が首とばね、目出度仇と報ゆれば、命は少しも惜まらずと、猶も奥へと斬
込ける。

詠松島歌

島はしも、許多あれども浦はしも、多にあれども、陸奥の松島の浦は、島が
らる、真細か島浦柄の、愛き浦其浦の、小島の崎も、打見る島のささく、振
見る磯の崎おちす、船浮て、廻らひ見れば、小女の眉更なして、實が崎は、南

へ奔り、鹽尻と伏たる如く、富山は北へそゝり、西へ空振放見れば、飛鷹の
 大山そびへ、東と顧みれば、宮戸の蛇靈峯立ち、こちくの、其山の間ふ
 百八十の島ころ並べ、夕煙霞の浦、淺緑青柳の島は、時自久に春めく島の
 久方の月見の崎、茜指桂の島は、常しへに、秋立島の、火打島、附木の島は、夏
 の夜に、海士の焚ある、漁火の残れる影の、風牙る寒風澤の、溜と、浪騒ぐ龜
 島の磯は、嵐吹、冬の餘波の、玉手箱、二子の島は、二並び、陸しみ見ゆ、丈夫の
 鏡の島、武夫の兜の島は、彌猛く雄々しく、みも、腰細の天女の島、白髪附翁
 の島は、宜しけく、向ひて居れり、八千矛の、大國島、鯨釣夷が島は、兄弟の、並
 ひて立り、竹の浦來よる、白玉、福浦にいよる、玉藻と、深海松の拾ひてあれ
 ば、潮垂る、苦屋の汀、あひしとも、海人は、思はず、盗人と人は、離言、崎見れば
 豊に立て、物掠む、懐もあし、蛇崎と人は、離言、崎みれば、長閑く出て、物ら吞
 さるむ口なし、雅士の墨書島の、鴉島の、漕さが浦と、風雅に負る島の名、ふ
 さはしく、負る浦の名、うべなうべあ、松島の浦は、真細き島の、真秀島、愛し

き浦のし、眞浦と、神代より、今の現、お、語繼言繼けらし、丸木船、枘もどほり
 て、真段顧み、それと、見る毎に、飽ぬ島も、あかぬ浦島

松島の八十島あけて漕行ば

浪の穂へに黄金山見ゆ

佐久間象山謫居の歌

信濃路は、ひあふはあれと、うらくはしやまにも、のふも、はるされは、はな
 さきとゝり、秋つけは紅葉あはへり、うとめで、のちき山もさ、あまつ日
 の、くるゝもしらす遊ぶなる、人もさはあり、しられとも、さすらふるみは
 春の野の花もあささす、秋山の、紅葉とも見ず、たらちねの、はゝの、あふこ
 の、まゆごもり、こもりてながく、年を経あける。

君がためたちはしりせむとべとなみ

あたらよはひのおいらくとしも

湘南秋信

昨日けふと思ひしも、早一月の旅衣、旅にはあられぬ苦しきよ、眺むるものは空の雲、雲の通路断せずとも、断えくゝなるは文の面、あそは来にけん友便り、あそはては又親や妹、偶にはあれと其さへも、要事のけては何ものも、有る者としては無りけり、まいて王子の紅葉だも、いかに見物る其とも、想ひやるのみ、詮術も、泣かなるれす、鬼や角と、案じ暮とは愚るにも、知るや知らずや、秋の霜、千脚にあり、照月も、哀れと見舞ふ、氣合なり、木の葉の落る音づれも、あるは馬入ふ馬と、偈、または雨降ふ雨み、大和心のるも、今年のみ、のり豊けさよ、民の命のあり、る紐、来る初春の事までも、嬉しく思ひ云まくも、君が代なれや、有がたし、白さと語る、丹き肝、田舎の住居よし、然るも、露の恵みの深さにも、酔て管まく、其代り、東京の摸様知らせたも

優婉 薩摩琵琶歌終

明治廿五年十月二十日印刷

定價金九錢

同年同月二十日出版

郵税 二錢

編輯 兼 發行 人

熊本縣平民

吉田 廣作

東京市下谷區上野花園町 十一番地 寄留

印刷 人

松本 秋齋

東京市本郷區湯島一丁目 十二番地



發行 所

櫻陰 書屋

東京市下谷區上野花園町 十一番地

○弊屋廣告

前外務大臣子爵榎本武揚公題字
前田曙山君序文 吉田廣作君編輯

平家琵琶歌初編

美 定價金八錢
郵税金二錢

目次。足摺。少將都歸り。蘇武。徳大寺巖島詣。殿上閣討。禿。小朝拜。大骨會。巖島還御。無紋沙汰。高倉宮園城寺入御。北國下向。惟盛都落。竹生島。忠度都落。文覺荒行。經政都落。落足(終)。「福原の花。檀浦の月。金鞍馬上に。秋風起る。

○各新聞批評左ノ如シ

○日本新聞評

平家琵琶歌初編

歌聲亮々琵琶鏗々平家の公達金鞍ふ跨がり源氏の剛者は馬蹄と飛ばす一誦の少年唾と碎いてチネーストと呼て起舞すべし

○郵便報知新聞評

平家琵琶歌初編 一團の素月と抱きて亡國の恨と歌ふ。縱然江洲の司馬ならざるも亦た青衫

と濕す此篇集むるところの平家琵琶歌「足摺」より「落足」に至る都て十八番

○朝日新聞評

平家琵琶歌初編 曹々切々の聲中に半世榮枯の恨と留めし平家琵琶の歌も何時の頃よりの絶えふしと此度吉

斯の如し吉田氏の薩摩琵琶歌と編集せる意も亦愛に在らん

○郵便報知新聞評

薩摩琵琶歌全 如今金風洛陽に滿つ一曲の琵琶と聴くも亦妙なり

○讀賣新聞評

薩摩琵琶歌 情府と能く刺戟するものは詩歌にして熱情薩摩武士の志氣と涵養したる所以と知る

○朝日新聞評

薩摩琵琶歌 曩に平家琵琶の歌の出版ありしが今又薩摩數十篇と蒐録と

○都新聞評

薩摩琵琶歌全(上野花園町櫻陰書屋發行) 吉田廣作氏の編輯の少なからず

○文學葦分船評

薩摩琵琶歌 曩に「平家琵琶歌」と出して好評と博せし吉田廣作氏は此回更に「薩摩琵琶歌」と編して之と公おせられたり蒐録せる所のものは金剛石より木崎原迄廿有餘の題目なり就中千尋海の好句佳章村里の景色自任都の春の艶雅縱横なる花月の精彩華麗なる或は赤星の初段より三段まで活潑にして凄涼なる執れも消魂の資ならざるはなく宛然住時の光景眼前に廻りて其哀れ忍ぶべからざるものあり讀た人希くは一團の素月と抱きて是と巧に搔きならし給へりし

○中央新聞評

薩摩琵琶歌 全壹冊 右は吉田廣作氏の編輯する所る金剛石中臣鐵足以下總て廿二曲と掲載そ中には随分面白きものも多く舐裁亦た雅美ふ出来たり

○弊屋廣告

前外務大臣子爵榎本武揚公題字
前田曙山君序文 吉田廣作君編輯

平家琵琶歌初編

美 定價金八錢
本 郵税金二錢

目次。足摺。少將都歸り。蘇武。德大寺殿島詣。殿上閣討。禿。小朝拜。大嘗會。巖島還
御。無紋沙汰。高倉宮園城寺入御。北國下向。惟盛都落。竹生島。忠度都落。文覺荒行。
經政都落。落足(終)。福原の花。檀浦の月。金鞍馬上に。秋風起る

○各新聞批評左ノ如シ

○日本新聞評

平家琵琶歌初編

歌聲亮々琵琶響々平家の公達金鞍
跨がり源氏の剛者は馬蹄と飛ばす一

○郵便報知新聞評

平家琵琶歌初編 一團の素月と抱きて亡國の
恨と歌ふ。縱然江洲の可馬ならざるも亦た青衫

と漏す此篇集むるところの平家琵琶歌「足摺」より「落足」に至る都て十八番

○朝日新聞評

平家琵琶歌初編 曹々切々の聲中に半世榮枯の恨と留
めし平家琵琶の歌も何時の頃よりの絶えみしと此度吉

田廣作氏が編纂したるものにして足摺以下十數篇一として往時の哀と忍ぶべからざるはなし

○寸鐵新聞評

平家琵琶歌 其初篇出す吉田廣作主人の編輯に成れる者なりげにや征旗一たび八洲の野と蔽ふてより革命の夜嵐に梅も櫻も色々失ひ糸竹の聲は泉浪の中に亂れて耳もあさましく汚れたる折のら思はざりき立珠玉盤お落ちて風色茲處に改まらんとは曙山人能くよんだ

○東京新報評

平家琵琶歌 其優美ナルコト春花ノ如ク其ノ悲壯ナルコト秋風ノ如キモノ此レ平氏ノ興亡ニアラズヤ而シテ其優美且ツ悲壯ナル興亡ヲハ歌トナシ更ニ之ヲ編輯セシモノ即チ是平家琵琶歌ナリ歌什タル総テ十有八章月黒ク雨細ナルノ夜コレヲ四經ニ推サハ大珠小珠落玉盤モノアラン鐵騎突出刃槍鳴モノアラン薩摩琵琶歌ト應行シテ清風ノ暑熱ニ於ケルガ如キモノアリ

○讀賣新批評

平家琵琶歌 緩シ儼スレハ松風ノ如ク急ニ朝ナレハ驟雨ノ如ク其聲悲壯凄涼ナルハ平家琵琶ナリ本編載スル所ノ詞十八悉トク新腹消魂ノ移ナラザルハナシ

○中央新聞評

平家琵琶歌 流行シ薩摩琵琶ハ書生間ニ行ハル、平家琵琶ハ之レヲ聞クヲ稀レナリ吉田氏其ノ古雅ナル曲ヲ編ス卷ヲ解ケハ悲愴壯快ノ氣紙面ニ溢ル

○國民新聞評

平家琵琶歌ハ優婉悲壯ナル平家ノ遺響ヲ再ビ世ニアラ
ハサントスルモノナリ 初編ニハ 足摺少將都歸、徳
大寺巖島詣、竹生島、忠度、經攻、維盛都落、其他十數曲收メヌ

北條古嶽道人辭字
中西梅花道人序文

吉田廣作編輯

薩摩琵琶歌全

美 定價金九錢
本 郵税金二錢

目次。金剛石。中臣錄足。新羅三郎義光。内大臣小松重盛。備後三郎高德。豊臣秀吉。
大石内藏之助。平將門。八島浦那須宗高。隈ヶ嶽。櫻谷直實。千尋の海。我戀。亂陣の
祝ひ。村里。歎の森。班女。都の春。休女。花月。赤星一二三段。木崎原一二三四五段。
忽ち泣き忽ち怒る。誰の薩摩琵琶と、讀まざるものぞ。

○各新聞批評左ノ如シ

○每日新聞評 薩摩琵琶歌 作歌金剛石より木崎原に至る総數廿二番、優
倭婉の者、皆な共ふ朱絃調和急緩抑揚し來らば或は春日烟霞境可く或は秋夜聽
砧斷腸の人たる可く所謂る、臥聽蕭管至春冬の思ひあらん(下谷)

○寸鉄新聞評

薩摩琵琶歌 諷誦の間ニ養成せられたる感想は暗裡に潤
琵琶歌と暗誦せしめ以て他日忠孝熱愛の好男子と作るに非ずや歌謡の効力既に

斯の如し吉田氏の薩摩琵琶歌と編集せる意も亦愛に在らん

○郵便報知新聞評 薩摩琵琶歌全 如今金風洛陽に満つ一曲の琵琶

○讀賣新聞評 薩摩琵琶歌 情府と能く刺戟するものは詩歌にして熱情
薩摩武士の志氣と涵養したる所以と知る

○朝日新聞評 薩摩琵琶歌 曩に平家琵琶の歌の出版ありしが今又薩摩
數十篇と蒐録す

○都新聞評 薩摩琵琶歌全(上野花園町櫻陰書屋發行) 吉田廣作氏の編輯
の少なならず

○文學葦分船評 薩摩琵琶歌 曩に「平家琵琶歌」と出して好評と博せし吉
田廣作氏は此回更に「薩摩琵琶歌」と編して之と公おせら

れたり蒐録せる所のものは金剛石より木崎原迄廿有餘の題目なり就中千尋海の
好句佳章村里の景色自任都の春の艶雅縦横なる花月の精彩華麗なる或は赤星の
初段より三段まで活潑にして凄涼なる孰れも消魂の資ならざるはなく宛然住時
の光景眼前に廻りて其哀れ忍ぶべからざるものあり讀た人希くは一團の素月と
抱きて是と巧に搔きならし給へりし

○中央新聞評 薩摩琵琶歌 全壹冊 右は吉田廣作氏の編輯する所る金
剛石中臣鎌足以下總て廿二曲と掲載そ中には随分面白き
ものも多く吟誦亦た雅美ふ出来たり

●文學雜誌 葦分船 列月一回 十五日出帆

六

一 裝載貨物の種類は小説戯文小品俳文新著批評文壇彙報雜報等にて思ふさまひたも
 の漕ぎに漕ぎ廻して一意専念彼岸に達するの覺悟可有之事
 一 別仕立一艘買切金三錢同半々年(六回)分前仕切金十六錢同一箇年(十二回)分前仕
 切金三十錢と相定め御手許廻しの節は別に御定め廻艘料可申受事
 一 投稿所は神戸市北長挾通四丁目六十八番邸山田芝之園方とす
 發行所は大坂市西區京町堀通二丁目三十九番地邸
 慧心社

○廣告

銅石木版雕刻印刷

弊店儀各位之御愛顧ニ依テ日ニ月ニ隆盛ニ相成
 難有奉謝候尙御依頼ヨリ敏速大廉價ヲ以調製仕
 候間舊ニ倍シ御用被仰付度此段伏テ希望仕候
 廉價之親玉 東京市淺草新旅 籠町拾九番地 精々堂佐藤權六

○弊屋近刻珍書左ノ如シ

○平家琵琶歌 貳編

○男色太平記 全

○廣告

●文學博士小中村清矩先生序
●國學院講師飯田武郷先生閱
●國語傳習所藏版
●飯田永夫君標註

標註 伊勢物語 全

定價拾貳錢
郵稅貳錢

本書ハ有名ナル日本文學書ノ一ニシテ和文和歌ヲ學フニ宜キ手本也今精密ニ文本ノ誤ヲ正シ參考ヲ附シ難語ニハ語釋ヲ加ヘ歌ニハ悉皆講釋ヲ付ケタレハ何人ニテモ容易ニ了解スル事ヲ得ル新板ナリ

天台道士 杉浦重剛序 新井周吉著 大矢森之助補

●不思議辨亡女

本書ハ神佛ノ人心ヲ物我ノ四國奇岩石○狐火○鬼火○筑紫ノ不知火○八幡ノ八幡知
らざ○鎌倉ノ星井○太宰府ノ飛梅○高砂ノ相生松○首陀ノ松口○天國ノ寶劍等ノ如
人劍難除及以妨引の妙號○成田山の守札○葦岐の金比羅の鑄口○天國の寶劍等の如
さ社會の文明と妨引の妙號○成田山の守札○葦岐の金比羅の鑄口○天國の寶劍等の如
の辨證の文明と妨引の妙號○成田山の守札○葦岐の金比羅の鑄口○天國の寶劍等の如
り家庭の幻燈理科教育として最も妙なる者にして其詐りならざるが如し實

發兌元

東京本郷區元
富士町二番地

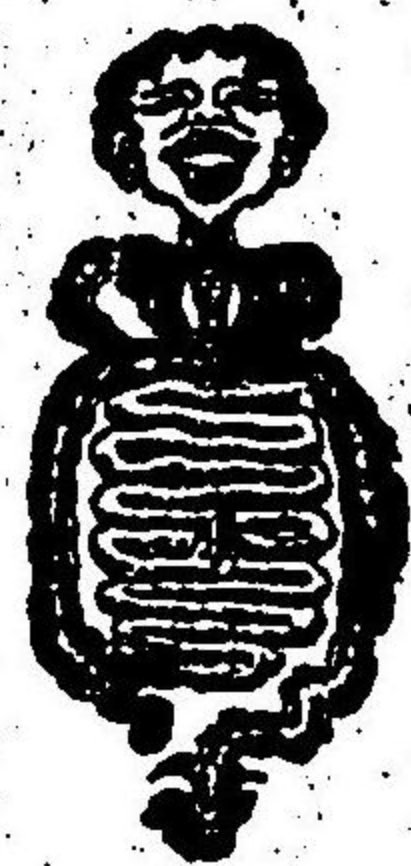
盛春堂

七

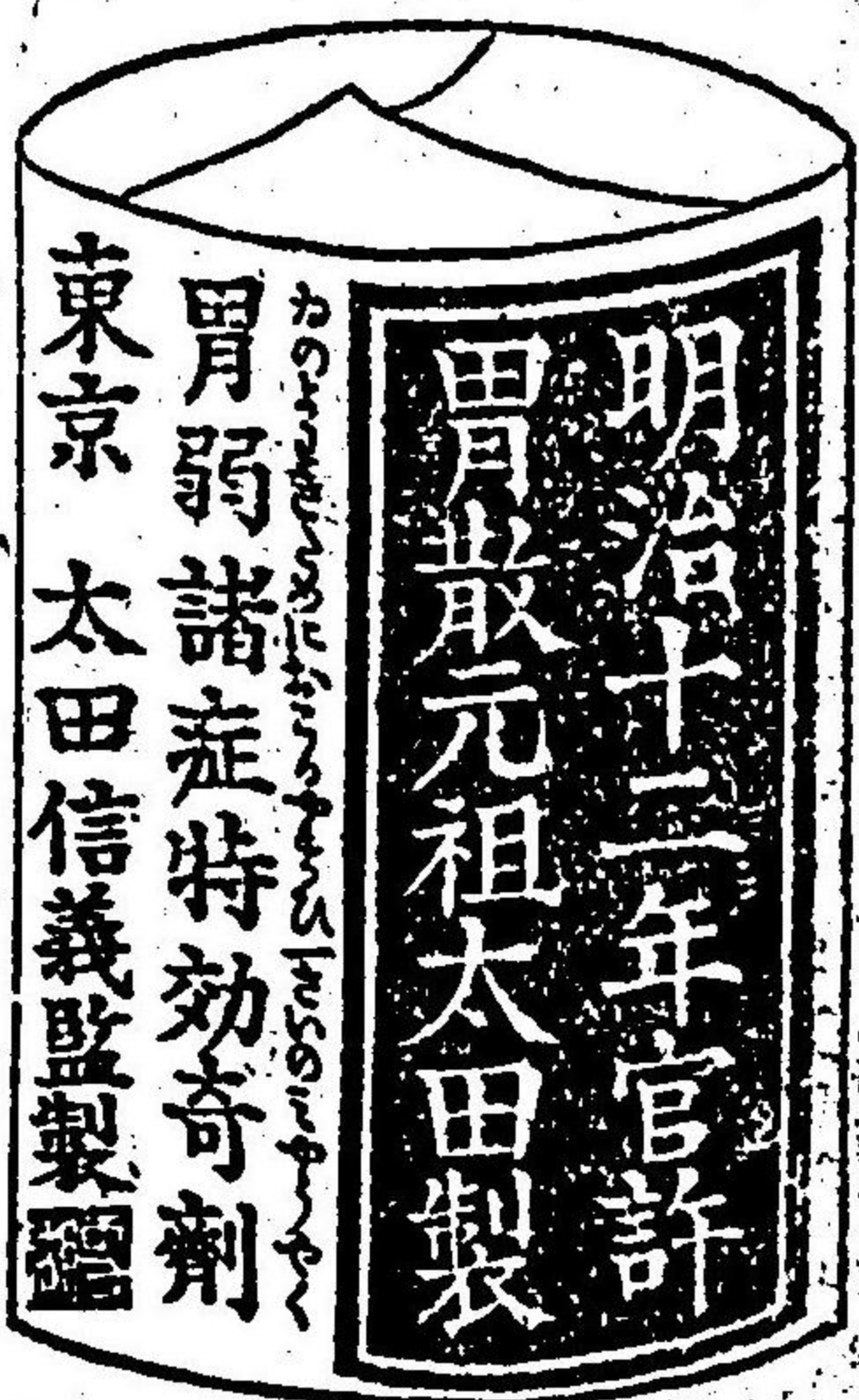
.....胃弱之症特効奇藥.....

近時諸方に同名類
似の賣藥少うらず

受録商標



乞ふ商標に御注目
あらんと



此藥は余が親しく經驗したる胃弱症の妙藥なり◎此藥を服用すれば必
らず疾苦と忘れ速うに爽快と得る絶世の良藥なり◎世間同症患者は速
うに此妙劑と試し其効驗の著るしき實に驚くべし

主治 ● 留飲 胃痛 胃痙攣 胸痞 食傷 宿醉
● 船酔 惡心 嘔吐 食飲 減損
能効 ● 風氣痞滯 飲食不消化

大罐 卅錢
中罐 廿錢
小罐 十錢

東京日本橋區吳服町拾壹番地

胃散元祖

雪湖堂

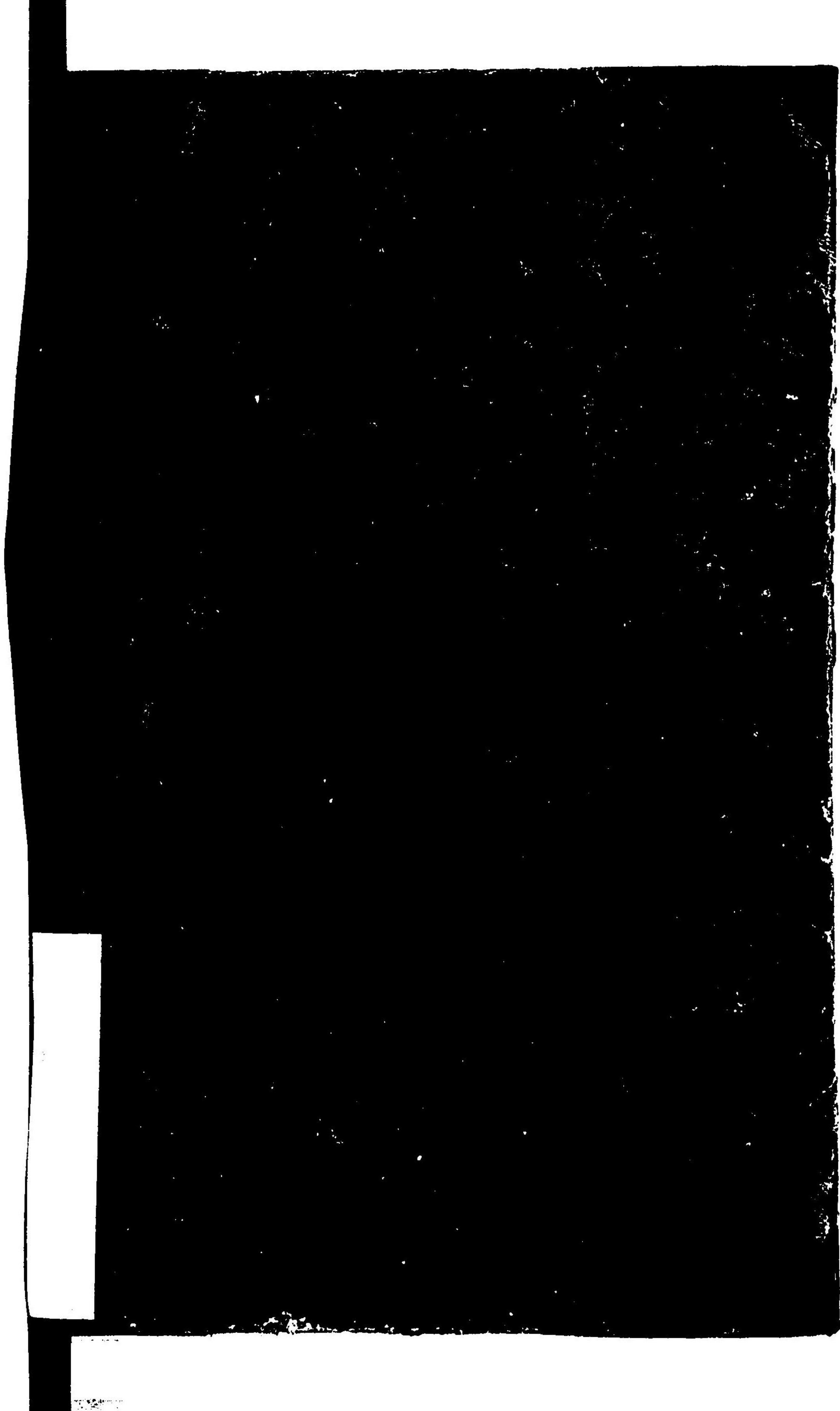


太田信義

敬白

.....元祖胃散之大廣告.....





18
321

Ⓜ

074605-000-4

18-321

薩摩琵琶歌 (優婉悲壯)

吉田 広作 / 編

M25

CEJ-0064



18
321